

## 5. お気に入りのもの

### 人との深いつながりと縁に、腑に落ちる物語

まず、河北泰三氏のお気に入りの本を紹介しよう。河北氏が真っ先に挙げたのが、東野圭吾の長編小説『ナミヤ雑貨店の奇蹟』（角川書店、2012年）である。同小説は、月刊誌『小説 野生時代』（角川書店）の2011年4月号～12月号に連載され、のちに単行本として発刊された。世界累計800万部を売り上げ、2017年9月には松竹（株）から映画化され公開された。

「ナミヤ雑貨店」という小さな雑貨店をつうじて繰り広げられる感情的な絆（人情）の物語であるが、過去と現在の時空をつなぐ物語でもある。人は一生懸命に生きようともがく。そのもがき方は十人十色。うまくいく人と不器用な人がいるが、いずれにしても歴史はつながっており、人はみな誰かによって生かされている。そんなことを改めて教えてくれる物語であり、涙が静かにほおを伝う作品である。

もう一冊、立川談志氏が若い頃に書いた『現代落語論』（三一書房、1965年）も河北氏のおすすめの本である。「現代落語論」というより「談志流落語解説」と言い換えることもできる。「笑いのセンスはこういうもんだ」と、教えてくれる本である。落語家はもちろんだが、聴き手にも笑いのセンスを持ち合わせていると落語を何倍も楽しめる。

落語の笑いには大雑把に言って、「なるほどなア」という笑いと、「奇想天外」の笑いがあるそうだ。そこに談志流の3つ目の笑いが



東野圭吾『ナミヤ雑貨店の奇蹟』

KADOKAWA / 角川文庫、

2014年

あり、「バカバカしさ」からくる笑いである。どうやらこの「バカバカしさ」の笑いが立川談志氏の一番の好みらしい。しかし、笑いの安請け合いはいけない。子供でもわかる笑いを振り撒いているうちに、返って笑いの質を低下させてしまう。落語には「落げ（オチ）」があり、話をよく聴かないと笑えないのが落語である。話をよく聴いていても、受け手が歴史を知らなかったり、想像の世界をもっていなかつたりすると、たちまち笑えない。何より、笑いのセンスは人間に興味がないと生まれない。

「談志流落語解説」をとおして、落語という古典芸能がいまでも現代芸能として多くの人に受け入れられている理由が、よく理解できる。また、立川談志氏がいかに落語に惚れていたのかもわかる。

落語の醍醐味は、義理人情からくる「人情嘶」にあるようだ。「落語の描く人情はあくまで、もっと素朴な、人間の善にたいする贊美」が落語の嘶である（同書、225頁）。立川談志氏によると、「双蝶々」や「牡丹灯籠」、「塩原多助」、「真景累々淵」、「子別れ」、「ねずみ穴」、「富久」、「唐茄子屋政談」などの人情嘶ができるようやく一人前の落語家らしい。

落語がいまも愛されている理由は、日本の誇るべき義理人情という文化・思想があるからだ。同書のなかで「村田英雄ってのはうまいネ」と立川談志氏が褒めているが、往年の大スター・村田英雄氏も「人情寄席」（作詞：星野哲郎、作曲：船村徹）という落語家の楽曲を歌っている。

つぎに、お気に入りの絵である。河北氏が大学時代に傾倒していたイラストレーターがいる。和田誠である。河北氏は、和田誠のイ



立川談志『現代落語論』

三一書房、1965年

ラストに落語に似たユーモアのセンスをいつも感じていた。七福タオルが製造するタオルや製作するCMにも、和田氏の絵と通じるセンスを感じる。明るくユーモアなセンスである。

## 落語とは、人情、いや一言では言い切れないもの

河北氏のお気に入りの最後は、帰するところ落語である。河北氏の人生に、落語とタオルは欠かせない。「河北氏にとって落語とは何か？」という質問をすると、こういう答えが返ってきた。

「落語はぼくの師匠のようなものです。落語にオチがあるように、どんなに苦しいことがあっても、必ず終わりがあることを教えてくれるんですね。それでいて、ごまかしのテクニックや切り替えの大切さ、何事も笑い飛ばすユーモアさも教えてくれる。日本の伝統文化であり、言葉の重みと同時に、物語から感じられる『人情』は、人とのつながりが尊いものであることを切に教えてくれるんですね。」

大学時代に出会った落語は、河北氏の人生における奇蹟だったのかもしれない。自社ブランド化という大きな決断をした直後、落研の先輩であった春風亭昇太氏に贈った「祝いのタオル」がきっかけでマスコミにとり上げられ、東急ハンズとの直接取引への道が拓いた。このチャンスを掴み実績に変えたのは、河北氏をはじめ七福タオルの社員一同の努力があったからである。七福タオルの節目には必ず落語があった。「笑う門には福来る」であり、「笑う門には七福タオル」なのである。

（完）

（文責・インタビュー：辻智佐子）

## 参考文献

上原太郎「戦略フォーカス 連載企画 地場力で稼ぐ（第6回）：七福タオル（タオル製造、愛媛県）NYセレブも唸る手触り『日経ビジネス』1329号、2006年2月20日、日経BP、58-60頁。

樺葉浩嗣「『新日本様式（Japanesque\*Modern）』協議会の活動概要について」独立行政法人経済産業研究所、2006年4月18日  
(<https://www.rieti.go.jp/jp/events/bbl/06041801.html>)。

河北珍彦「河北家略譜」1989年（河北泰三氏提供資料）。

七福タオルHP (<https://www.shichifuku-towel.co.jp/>)。

立川談志『現代落語論』三一書房、1965年。

## 編集後記

タオルをあえて日本語に訳すと「手拭い」です。手拭いは落語で使う小道具であり、タオルと落語は赤い糸でつながっています。こうしたわけで、河北さんの落語との出会いは必然であったとも言えます。

落語の面白さは河北さんから教わりました。もう10年以上もまえの話になりますが、立川志の輔さんの渋谷パルコでの独演会に招待していただき、落語を初めてライブで聴きました。泣いて笑っての繰り返しで、志の輔さんの語る人情物語に感情を揺さぶられました。そして、このたび河北さんへのインタビューのまえに「笑点」の収録に招待していただきました。テレビから流れる「笑点」が日曜日夕方のいつも風景であり、茶の間でみる「笑点」も凡々なりに風情がありますが、読売ジャイアンツの聖地・東京ドームを横目に後楽園ホールに向かう道のりは非日常であり、昼間のライブでみる「笑点」は格別です。落語家さんと一体感が生まれ、われわれ観客の笑いも芸の一部と化した錯覚に浸れます。とんちの効いた笑いにプロの芸を感じられ、真似したいけど真似できない積年の技に「笑い」しかありません。



友人による

河北泰三氏の似顔絵

七福タオルもおなじです。真似したいけど真似できない唯一無二のタオルを創る七福タオルは、積年の技とタオルへの深い思いがあります。そして「笑い」と。「笑う門には七福タオル」、笑いのしづくがこぼれるたびに「七拭くタオル」なのです。

### 次回の「タオルびと」

「タオルびと」の42人目は、タオルマイスターの阿部憲政氏である。現在、阿部氏は（株）阿部春工場の代表取締役兼工場長であり、タオルをつくる傍ら、経営者としても日々マネジメントに勤しんでいる。経営者が生粋の技術者であるスタイルはいまでは稀な存在となつたが、次回は阿部氏のタオル人生にフォーカスする。

